JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE
都市環境デザイン会議
東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI
071
20.MARCH 2003
特集 新潟市
発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集：新潟市
1．新潟の街の価値を考える……1
2．景観を発見し育てる……2
3．景観を育てる 人を育てる……6
4．新潟の町の価値を育む……12
●第13期定例総会……22
●事務局より……24
●編集後記……24

新潟の街の価値を考える

横山 裕
YUTAKA YOKOYAMA
（財）新潟観光コンベンション協会

■ときメッセの誕生

新潟市の信濃川の河口に、ときメッセというコンベンション機能を中心とした大規模な施設ができた。ときメッセは、新潟の港の風景を一変させ、多くの人々の注目を集めるところとなった。しかし同時に、ときメッセは、新潟市民の街としての危機感を植え付けさせている。全国に次々に現われるコンベンション施設の競争は、そのまま都市間競争を意識させ、新潟の街の魅力、価値を磨かなければという危機感である。

■ 市民のまちづくり活動の限界

新潟市は、かつては街には堀が巡り、明治には開港五都市のひとつとして、『湊町』、『水の都』と言われている。
実際は、都市の近代化の中で、堀を道路に埋め、信濃川の川幅を狭めてきた都市整備の歴史を振り返ってみると、果たして「水の都」「港町」といえるものか疑わしい。
キャッチコピーのみが街の中に残っている。
しかし今、新潟の街のなかでいくつかの動きが起きている。
ひとつは掘割再生物語プロジェクト実行委員会であり、もうひとつは万代橋を巡るまちづくりの動きである。さらに今、新潟の下町にある町屋保存再生の動きも出てきている。
これらは、どれもが市民の想いがその活動の原動力となっている。しかしそれらの個々の活動が、なかなかその先の展開に行き着いていないのが現状である。その先を目指すため、必要なことは、個々のテーマをつなぎ、目指す都市象を共有しながら、活動のパワーアップを図ることが求められる。市民活動どうし、市民活動と企業、さらに行政とのネットワークの構築、関係づくりが不可欠なのである。

■ 新潟の街の新たな関係づくりの構築へ

市民のまちづくり活動と同様、新潟の街の風景においても、今まで景観づくりの取組みは限界に差し掛かっている。例えば新潟のシンボルといえる万代橋は、橋そのものの価値ばかり議論されているが、大切なことは、万代橋を眺める楽しみを育んでいかなければ、眺める市民の愛着も湧いてこない。景観においても、眺める対象物、眺める場所、眺める人の関係が重要となるのである。
かつて万代橋に景観照明を設置し、夜の魅力を浮かび上がらせることで、市民のなかで万代橋の価値を再認識し、周辺に万代橋を意識する施設が建ちはじめ、橋の周辺が魅力的になっていった。しかしそこで場所の成長が止まっているのである。
そこからどう場所の質を高めていくべきか。今その課題に直面している。
本特集は、新潟大学に赴任して以来、２０年間にわたり、新潟のまちづくりに刺激を与え続けてくれた樋口忠彦氏が京都大学へ移られたことを記念し、開かれたトークショーを取り上げるものである。そこに場所の価値を高める、可能性が見いだされるのではないか。と思っている。

景観を発見し育てる（日本海夕日コンサート）

樋口　忠彦

HIGUCHI TADAHIKO
京都大学教授

樋口　潤一

HIGUCHI JUNICHI
（財）新潟観光コンベンション協会

（樋口　忠彦）
今日はたくさんお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。普段はあまり緊張しないのですが、すごく緊張しています。
急に転任が決まりまして慌ただしく新潟を去ったわけで、非常に心残りでありまして、何か会を設けた方がいいのではないかということを何人かの方に言われまして、私もそのとおりだと思い、こういう形で多くの方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。
今まで新潟で幾つか関わってきておりますけれど、その中で成果が出た、特に面白かった３つのプロジェクトについて、当事者の方と私が話をしながら、振り返る形式にさせていただきました。よろしくお願いいたします。

（司会；横山　裕 ）
なるべくリラックスした形で対談を進めていきたいと思います。
最初は景観の発見ということで、日本海夕日コンサートの取り組みです。これは発見だけではなく、発見して育ててきたプロジェクト、特にこれは十五、六年くらい前に起きたことでしょうか。景観でいいますと、対象物を何か生かせないかということで、新潟でまちづくり的な活動が起きてきたところを、最初にお話していただきたいと思います。
夕日コンサートを立ち上げた樋口潤一さん、よろしくお願いします。

（樋口　忠彦）
それではまず、最初のいきさつからお話したいと思うのですが、私が新潟に来たときに、二つの点が面白いと思いました。一つは、これは川端康成が言っていることで「トンネルを抜けると雪国であった」、非常に劇的な展開をするわけですね。私が来たのが３月末ころだったと思いますが、新幹線の中で歓声が上がるわけです。関東は冬ですから非常に天気がいいわけですが、あそこに来て急に雪景色がはじまるわけです。まさに非常に劇的な雰囲気で、すごいところだなと思った。
もう１点は日本海の魅力。この２点がやはり新潟の売りではないかと。特に関東側に対しての売りではないかという印象を強く持ったわけです。
新潟に来てから新潟大学の近くの五十嵐住宅という国家公務員住宅に住みましたが、これは日本海がすぐそばなので、気候がよくなると家族で一緒におにぎりを作って、缶ビールを下げて夕日を見に行く、砂浜に涼みに行くということをやっていて、非常にいい所だなと思っていました。
ただ、そのころ拉致事件が起こっていたのを私は全然知らなくて、どうして新潟の浜はこんなに素晴らしい風景を持っているのに、誰もいないのだろうかと思ったわけですが。原因はよく分からなかったのですが、うわさとしては、どうも背景には拉致があったのではないか。そういうのがあったようです。よそ者としては全くそんなことは分からなかったので、こんな豪華な夕日があるのに、何てもったいないという印象を持ちました。
そんなことを新聞のコラムに書いた覚えがあります。劇的な雪国という展開と、それから日本海と夕日という、この資源を何か生かすべきではないかということを、書いたのではないかと思います。
その後、どこかから講演の依頼がありました。そのときにそんな話をしたのではないかと思います。そしてその会議が終わったら、樋口潤一さんと、あと何人かの方たちが私のところに来られて、夕日コンサートをやりたいという話を私に持ちかけたのですね。それが最初の出会いだったわけです。そのあたりを、どうして夕日コンサートという話がまず持ち上がって、どういうふうな形で立ち上げていったのか、イベントとしていこうと思われたのか、その辺の経緯をお聞かせいただけますか。私は全く知らないのですが。

（樋口　潤一）
新潟観光コンベンション協会の樋口と申します。よろしくお願いします。
昭和 60 年に実行委員会を立ち上げて、61 年の夏に最初の夕日コンサートを開きましたが、当時、高速交通網がほぼ完備され、青年会議所の皆さんが、新潟にコンベンションビューローを立ち上げようという動きがありました。その背景を踏まえ、新潟の都市の魅力を高めていきたいという気運が高まってきました。
今から十七、八年前ですから私は 39 歳でしたが、ちょうと同じような年代の人間が七、八人集まりまして、この年代というのは学校にプールがなかった世代、水泳といいますと今の寄居浜、護国神社の裏で学校水泳をやった最後の年代かなと思うのですが、そんなこともあってか、一番新潟らしいもの、新潟の都市イメージを高めるものということで辿り着いたのが日本海に沈む夕日でした。夕日をテーマに新潟の都市イメージを高めていく、そのためには一人でも多くの方に夕日を見てもらいたい、そして、夕日を見てもらう手段として、あそこでコンサートを始めたらどうかというのが、コンサートを始めるきっかけですね。

（樋口　忠彦）
その結びつきが面白いのですね。
どうしてコンサートと夕日が結びついたのかというあたりが。

（樋口　潤一）
昭和 61 年、62 年の２年間、夕日と海、これを市民の憩いの場ですとか、新潟にいらっしゃった方へのもてなしの場としてどう活用していったらいいかというアイデア募集をし、その時に先生に審査委員長をお務めいただいたわけです。

（樋口　忠彦）
夕日をどう演出するかというのは、これはなかなか難しいわけでして、夕日はいいなと、それだけで終わってしまうわけです。
夕日というのはどこでもあるわけ。日本中どこでも資源として持っているわけですから、それをどう生かしていくかというのは難しいところだと思います。
ただ、日本海と瀬戸内海、この夕日は日本の中でも素晴らしいところではないかと思っています。
松尾芭蕉が奥の細道で東北道をずっと上っていって、松島、それから中尊寺を見て、山形を通って日本海に出る。そのとき、彼の歌が急変します。
その最初の句が「暑き日を海に入れたり最上川」という非常に壮大な句です。熱い太陽がジュウッと海に入っていく、実は太陽で暖められた最上川が海へ入っていく、多分夕日もあるのでしょうけれど、その壮大な風景をとらえていくわけです。
新潟に来て有名な「荒海や佐渡によこたふ天の川」という、これもまた非常に壮大なというかスケールの大きな句を詠む。日本海に来て変わったのですね、彼の感覚が。
どうもそうではないかと思うのです。
それは日本海と夕日が変えたのではないかと私は思います。それから天の川ですから空、ですから空と海、それが非常に深い印象を与えたのではないかと思います。そういう意味で非常に貴重な資源なわけです。
ただそれをどう生かすか。これは山形もあるし秋田もあるし、新潟もあり富山もあり、ずっと日本海はあるわけです。
それで、どうしてコンサートだったのかなというのをいつも思っていて、その辺はどういう、ちょっと思いついたという感じなのですか。

（樋口　潤一）
先ほど言いましたとおり、何とか夕日を見てもらいたいという、最初は有料にしようという話もあったのですが、何しろ砂浜ですから、囲いを作らなければならない、入場料より囲いの代金の方が高いというのがあって、今は 500 円のカンパをいただきますけれど、無料でやっちゃえと、ずっと入場無料です。

（樋口　忠彦）
こういう演出の仕方というか、桟敷みたいなものですよね、浜茶屋と同じような感覚で仕掛けを作ったということだと思うのです。夕日コンサートが終わるとそれを全部取り払って、元の砂浜に戻すという、これがすごいと思うのですね。
普通コンサートというと、ちゃんとしたホールを作りましょうとかいうことで、自然と全く切れた中で音楽を聞いて、はい終わりという、そういう西洋的なのかもしれませんけれど、西洋的な建築世界というのは箱の世界なのですね。いつからそういう世界になったのか分からないですが、どうもそういう世界と違うイメージが打ち出されたというところも、人気の秘密なのかなと思ったりしています。
ですから、砂浜で皆さんが遊ばれていたとかいう感覚が生きているのではないかという感じがして、そういう原風景というか。

（樋口　潤一）
だと思います。やはり新潟の人にとって、とても心地よい場所。
その心地よい場所で夕日を見ながら、夕日が沈んだ時間に音楽が聞けるという、とてもいい時間を過ごしていただけているのではないかとは思います。

（樋口　忠彦）
誰にでも見えるのだけれども、それを一緒に、今５万人くらいですか。

（樋口　潤一）
小針に移ってからですけれど、警察の関係者の方が４、５万人だと発表されたのですが、私どもは多分２万人くらいだと思っているのですね（笑）。
ただ、そうやって１回発表してしまうと、なかなか元に戻せないという、いつかちょっと修正したいなとは（笑）思っています。

（樋口　忠彦）
最初は何人でしたっけ。雨がちょっと降ったりして。

（樋口　潤一）
最初の３年間はほとんど夕日が出なかったですね（笑）。
最初の年が千五、六百人くらいで、関屋浜での３年目が 8,000 人くらいという発表だったでしょうか。それで、もうあそこでは人が入りきれないということで、平成元年の４回目のコンサートから小針浜に移り

ました。

（樋口　忠彦）
夏の浜辺というのは納涼には最高ですからね。
日本では納涼の名所というのが昔からあって、江戸なんかですと隅田川沿いにみんな出て行って、クーラーとかないですから、そこでみんな夕涼みをして、遊んだり、花火をあげたり、あるいは人が舟に乗って舟遊びをする。そういうことで、夏の夕方というのは非常に魅力的な雰囲気が漂っていますね。それを捉えたというのは面白かったと思います。
　夕日というのはいつもあるし、一人一人が体験するとそれなりに感動するけれど、数千人が同時に夕日を見る、共有するという感覚、それもいる人にとっては楽しいのかなと思いますね。そういう意味で、いろいろな自然現象とか風景の演出の仕方で感動を生み出すということがあったのではないでしょうか。そういう意味で大成功だったと思いますが、振り返ってみていかがでしょうか。

（樋口　潤一）
海岸線に車を止めて、夕方から夕日が落ちる時間帯を見る人が、夕日コンサートが始まってから結構多くなったなと思います。
５年くらい前に海に近い所に引っ越したものですから、時々夕方は海を見に行ったりするのですが、コンサートが始まった頃よりは、ずっとそういう方々が増えたなと思います。
一度、浜茶屋の方に言われたのですが、東京の方から主婦のグループの方々が夕方いらっしゃって、雨が降る寸前のような天気だったそうですが「夕日はどこから出るのですか」と聞かれたという（笑）。
その辺、責任も感じたりしているのですけれど。

（樋口　忠彦）
太平洋の人にとっては、海から太陽が出るものと思いますから、しょうがないのではないでしょうか（笑）。
そういう意味で、非常に当たり前の自然現象ですけど、これを非常にうまく演出されたと、しかもお金をほとんどかけないで。
日本のお花見とかあるいは紅葉（もみじ）の季節だとみんな出かけていったりする、そういう感覚と同じ感覚で夕日を利用したということ、これも日本人の感性に非常にフィットしたのかなと思っています。
日本ではいろいろな所で、それ以降夕日を使ったキャンペーンがあるのですが、そういう所との交流などはあるのでしょうか。

（樋口　潤一）
夕日キャンペーンが始まって４年目くらいでしょうか、県の方で海岸線を日本海夕日ラインというネーミングをしまして、瀬波とか幾つか、夕日の見える公園の整備ですとか、小学生を主体にした夕日コンサートを開催したり、そういう方々と一緒に、これからどうやってお互いに夕日をテーマにしてまちづくりに生かしていくかということで、サミットを２年ほどやりました。

（樋口　忠彦）
それ以降はあまりないですかね。

（樋口　潤一）
はい、今は他の町の方々との交流はほとんどやっていないと思います。

（樋口　忠彦）
四国のある所で同じように夕日を仕掛けて、多分そこもコンサートをやっているのでしょうか、非常に有名になったという、その当事者の方が今日の話のように、どういうふうなきっかけから始めたかという話を、ＮＨＫラジオの深夜便の中でしていました。
それは小さい駅のホームを舞台にして、その向こう側に海があって夕日が沈むという場所のようですけれど、そういう話をしていまして、いろいろな日本のほかの所と提携してやるというのも、何か面白いのではないかと思います。けれど新潟は新潟なりでやっていますよということでもいいのでしょうけど。
何か、今後の展開ということはどうですか。

（樋口　潤一）
今年で 18 年目ですか、今、実行委員会の名簿には載っていますが、実行委員らしい働きというのはほとんどやっていなくて、今は「寺町からの会」にはまり込んでいるものですから。

（樋口　忠彦）
現在は、市の方からも、かなりお金が入っているのですか。

（樋口　潤一）
総予算の約半分の 2,500 万円ほどが市からの助成金で、あとの半分が企業の方々や当日の個人カンパにお願いしています。

（樋口　忠彦）
もう定例の行事になっているということですね。

（樋口　潤一）
そうですね。

（樋口　忠彦）
そういう意味で成功した事例だと思いますが、樋口さんのような人がまた新しく生まれて、別の何かを考えていくというか、夕日ではない新しい発見をしてもらっても良いのではないかという感じがします。

（樋口　潤一）
ええ、隣に座っている横山さんとか、後でここへ上がる野内さんとか若い方など、いろいろと楽しい方が活躍しはじめられたので楽しみにしています。

（樋口　忠彦）
そうですね。そういう意味で非常にうまくいったといいますか成功した事例ではなかったかと思います。最初出発したのは、旅館組合の青年部ですか。

（樋口　潤一）
旅館組合の青年部ですね。それをベースにして何人か、旅館以外の方も参加されています。

（樋口　忠彦）
非常に現実的なことをいいますか、自分の所にお客さんをたくさん呼ぼうという、そういう切実なものがあって、それでこの運動は始まったというところが大きかったのではないかなと私は思いますけど、だから単なるイベントじゃなかったというところがあるのではないですか。具体的に儲かったかどうか知らないですけれど。

（樋口　潤一）
あの頃、観光ですとかコンベンションの誘致ですとか、お客様にどう新潟においでいただくかとか、そういうシンポジウムとかフォーラムとか、業界でもけっこう勉強会のようなものをやってきたりして、もうそろそろ何かやろうよという、勉強ばかりしていてもしょうがないだろうという、そんな気運がその七、八人の中にあったのだと思います。
あとは本当に小さなことですけれど、旅館組合の若い連中が主催をして、当時まだ旅館も 100 軒くらいあったものですから、運動会ですとかミニイベントを業界の中でやっていたのですね。規模はとても小さかったのですけれど、それでお互いの力量がわかった、この仲間とならあれぐらいのことはできるなという、そんなことがあったように覚えています。

（樋口　忠彦）
お役所主導のイベントとか、様々な形で行われたりしていますけれど、リアリティに欠けるところもあるのですね。
ですから切実な欲求というものがあって、その中で是非やらなくてはというところから出てきたということが、大きなポイントかなという感じはします。
そういう意味で、これからまちづくりをしていく上で、そういうリアリティみたいなものがないと、長続きしないところもあるし、必死になってやらないというとろもあるのかもしれませんね。
現在は行政の方とタイアップしてやっているわけですけれど、そういう意味で軌道に乗っているのでしょうが、次というのは求められているという感じがしないでもないです。そんなところでまとめましたが、何かあれば一言。

（樋口　潤一）
夕日キャンペーンをやっている最中も、平成元年は 600 万円くらい赤字でした。それからあそこにモニュメントを一つ建てて、あの年も五、六百万くらい赤字になったのですが、何とか翌年にそれを穴埋めしながらということでやってきました。
10 年間夕日にかかわってきて、だれが何のために何をやるのかということさえはっきりしていれば、お金は後からついてくるというのは、僕の 10 年間で夕日からもらった一番大きな教訓でした。
今、寺町からの会をやりながら、若い人たちにはいつもそんなことを言って、夢を膨らまそうと、お金は後からついてくるぞと言っています。

（樋口　忠彦）
今後ともよろしく若い人たちのご指導をお願いします。

景観を育てる　人を育てる（大地の庭プロジェクト）

樋口　忠彦
HIGUCHI TADAHIKO
京都大学教授

松山　雄二
MATUYAMA YUUJI
（財）新潟県都市緑花センター

池田 博文
IKEDA HIROBUMI
翔アトリエ

（司会；横山　裕）
続きまして第２部、今鳥屋野にスタジアムがありますけれど、あれが作られるプロセスの中で６年前に開かれた都市緑化フェアの中で、大地の庭というプロジェクトが行われました。それは新潟の人たちが力を合わせていろいろなことをやったプロジェクトで、特に新潟のまちづくりの中では語られるべき点だと思います。
第２部では大地の庭を手掛けた松山さんと池田さんにご登場いただき、樋口先生といろいろお話をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

（樋口　忠彦）
大地の庭プロジェクトの、まず仕掛け人としてどうしても話していただかなければいけない。今日は松山さんお忙しいところをおいでいただきまして、お役人としてこういうプロジェクトを立ち上げたというところをまずお聞きしたいのですが。

（松山 雄二）
私、昭和 40 年に新潟県庁に入って、ちょうどこのプロジェクトが始まるときは 25 年たっていたのですが、この間、県の都市計画の仕事に携わっていました。
しかし、その仕事の中身を見てみますと、やはりハード中心。ちょっと大きなプロジェクトですと、すべてが中央のコンサルタントに委託すると、こういうのがずっとあったと思います。そういったものを実際見ている中で、これでは新潟の町はよくならないなというのをずっと感じていたというのがあります。そのことが一番大きいことだろうと思います。

（樋口　忠彦）
普通、お役人として仕事をする場合、できるだけ煩わしくない、今までのやり方で慣例にのっとってということがあると思うのですけれど、その辺、慣例を破ってこの機会に新しいことをやってみよう、新しい試みをやろうという、その辺が松山さんらしいところではなかったかと思うのですが、そういう意味で私非常に尊敬しています。

（松山 雄二）
その点、県庁マンとしてはいろいろな分野の方と接するといいますか、何かあると出掛けるという野次馬根性的なのがありまして、新潟県内にはまちづくりという点で見た場合に、いろいろな分野で素晴らしい方がおられるということが一つ分かったというのがありました。
そういったことを実感しながら、実はこのプロジェクトの前に、樋口先生と公園づくりについての将来ビジョンを持とうということで、これも今までですと全部コンサルタントに委託をしていました。これは少し煩わしいけれども、自分たちでやってみようじゃないかということで考えたわけです。
それともう一つは、やはり今まで行政の都市計画の分野ですと、国の基準とかを把握すると一人前のまちづくり、都市計画課だというような状況だったわけですが、これも違うと。
そういった点では、県内でこういう分野に携わっている人たちが一緒になって勉強しようと。人づくりも一緒にできればいいというのがあったと思うのですね。そういった点ではやはり人材の面も、あるいは新潟は非常に素晴らしい宝、自然の景観があるという、そこをどう生かすかということに、まず焦点を当てたい。というのがありました。

（樋口　忠彦）
ポイントは、公園などは県の企画展みたいな形で、そこにある施設を作るという話だったと思うのですが、通常はどんな施設を作ろうかということで終わってしまうところを、松山さんの優れたところは、それと同時に人を育てようと、あるいは今までいる人をうまく結びつけてしまおうと。
さらにいい成果というか、公園施設とかそういうものも作ろうという、その辺がすごく面白いですね。つい、ものができればいいと、いいのができればいいということになっちゃうのですけど、そこは非常に面白かったと思います。
池田さん、どうですか、その辺、直接選ばれたわけですが。

（池田　博文）
私はその前に、たまたま松山さんとは小さなモニュメントを作ってくれというプロジェクトでお会いしたことがありました。
私の専門は建築の設計ということで、わりと私的な空間の内部ということをずっと仕事にしていたところに、都市環境の中にモニュメントを作るという話を持ちかけられて、いろいろ外の人とやりとりしながら、橋の上にモニュメントなんて本当にいるの？というところから始まって、作らない方がいいのでは、ないかという話もやりとりの中で出させてもらいました。作らない方がいいかもしれない、でも作らなければいけないのだ、さあどうしようという、最も話の根本的なところで自分自身も実は迷いがありました。
それまでの行政側から作られている都市計はじめた段階で、市民との様々なやりとりとかワークショップという形もある程度定着はしてきましたけれども、発注する側と受注する側という形で、ものを作る側が、

出していかなければいけない。都市が利便性をもって居心地がいいのは、都市の周辺部にある野山であり公園でありという形ではなくて、大地の上に都市と同時に緑やら我々が生きる場というものを共に育てながら作り、それもまた循環させていくという仕組みを持ちながら、今回の緑化フェアというイベントをやってみようということで、５社二十数名の人たちとやっていったイベントであります。

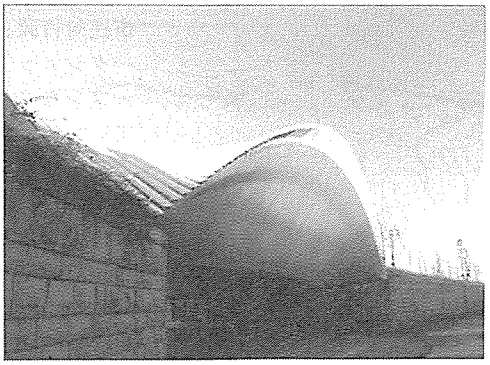
一番上の方で樋口先生に入っていただきながら、私や造園デザイナー、あるいはアートデザイナー、都市計画家というグループと若い人たちという形で、最終的には若い人たちから次のネットワークにつなげながら、最後、このプロジェクトが終わった段階では、運営側の人間としてプロジェクトの方々に参加いただいた方が約 500 名、来場者は別ですが、そこまで及んでいきました。

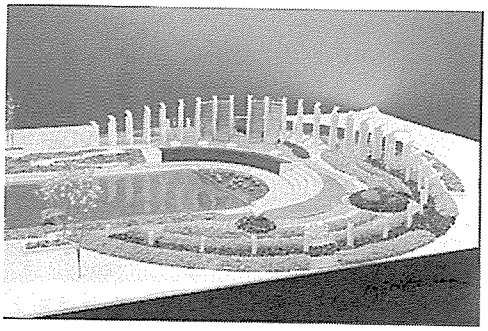
途中での慌ただしい制作風景ではありますが、この段階で実は県の内部でも、緑化フェアを進めていくうえにおいて随分異議が出たような形になりまして、これも松山さんのご配慮で、この模型を知事室に持ち込ませていただいて、知事に直にプレゼンテーションをさせていただいたということであります。

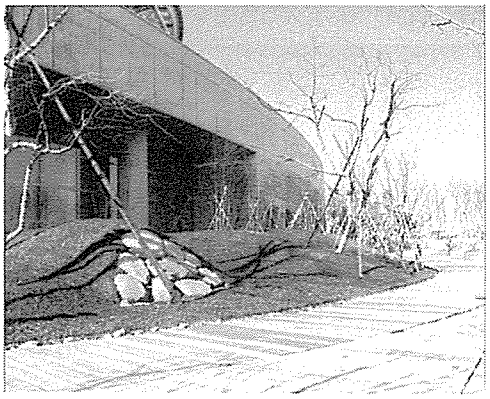
これが緑化フェア開催前日の風景であります。ここを主体に県のテーマ展示というのが行われてきまして、少しもめた結果、先ほどの模型とは少し違うのが、半分だけが緑化されていて、半分が当初計画のとおりに舗装されているというカナールの広場が見えていますが。これは現在の素材と古くからの素材、それから新しい構造形式、形状、これも万代橋に近い橋にしてというあたりを、もう一度今の時代に架けた今の橋という形で進めていきたいということで、構造設計者二者、デザイン設計二者、あとは松山さんの部署の若い人たちも 10 分の１の模型から 100 分の１の模型まで、最後は原寸模型まで作りながら喧々囂々という部分であります。

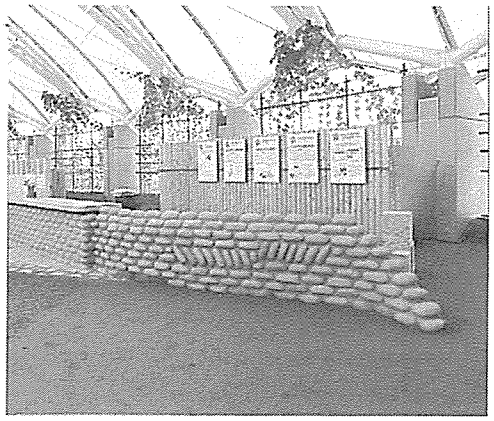
一番最後に仕上がった正面ゲートの部分です。それからスポーツ医学研究所の前の緑地部分ということで、実際に公園の全体をしていきながら、その中でこのテントの部分を主体にさまざまなフェアが行われてきた。素材という部分に関しても、現在の素材から過去あった素材、そして白根の田土と安田のマサド、それを練り合わせたダンゴで作られた壁、杉の間伐材等を使いながら、この中で具体的に参加者が自分で参加することによって、居心地を確保できるという場を作っていこうと。

夜の照明に関しても、すべての部分で同様に注意深くデザインを検討し、ＣＧあるい









市民対行政という構図ではなくて本当にワークショップができるかという、そこでイーブンなやりとりでものを組み立てて考えていくことができるのかと思っていました。ところが松山さんとお会いして、行政の方にもこういう方がいらっしゃる。彼であれば十二分に僕らの力を引き出したり、僕らを上手におだてて動かしてもくれるのではないかということで、大地の庭プロジェクトも、先が見えないプロジェクトでありましたけれども、やってみようじゃないか、突っ込んでみようじゃないかと、この内側では完全なワークショップをしてみせるぞというつもりで、取りかかることができました。

（樋口　忠彦）
具体的にどういう人たちなり。

（松山 雄二）
あれはちょうど平成 10 年に完成されましたが、特に全国都市緑化フェアの一つの主催者としてのテーマ展示だったのですけれど、やはり大きな時代の節目だということで、是非樋口先生にアドバイザーになっていただこうと。
時代的に 20 世紀から 21 世紀へ、21 世紀のまちづくりはどうあるべきかというのをしっかり展望しようじゃないかと、そしてワークショップに発展していく形になったのだと思いますけれども、大きくとらえるということも大事なことだったんじゃないかと思います。

（樋口　忠彦）
その辺、やはり松山さんの面白いところだったと思うのですが、その前に公園がどうあるべきかという議論もずっとしていたという蓄積もあったでしょうね。その中で、やはり責任者として仕事をやるという意味では、けっこう大きな仕事がちょうどぶち当たったという感じだったのですか。

（松山 雄二）
そうですね。都市計画の場合、いくらいい人がいて、そしていい考え方があったとしても、やはりタイミングというのがあると思います。この時期を逸したらできないということがあって、そうした点では、私もまちづくりについてかなり疑問を感じたり、中央集権的に何か全部国の基準に合ったやり方でなければだめだとか、そういうのにかなり反発していた面があったのですが。
そういった点ではなかなか自分が中心になってやれるポジションがなかったのですが、たまたまいい巡り合わせで、ちょうどこのプロジェクトをやるときに担当になったという、非常にラッキーだったと言えます。

（樋口　忠彦）
私はちょっと年上ですが、実際にプロジェクトを動かしていくうえで選んだ人が、池田さんをトップにして、大体池田さんの年代、年齢的にどれ位だったんですか、平均年齢は。

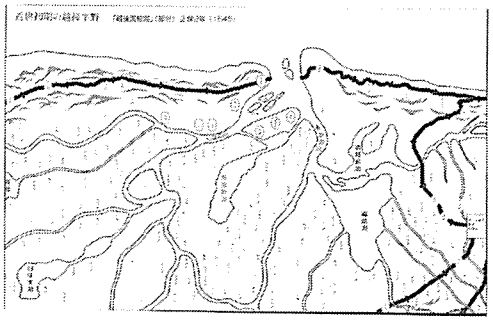
（池田　博文）
今日ここにも、そのプロジェクトに携わってくれた方、そこの会社の代表の方などが何名もいらっしゃいますが、一番最初に話を伺ったときに、それだけの限られた時間で、なおかつそれだけの大きな県のイベントであり、展示という形ではありますけれども、単なる壁面に何かを貼ってという展示物ではないというところで随分主張しました。
幾つかの会社を回ってその代表者にお願いしながら、若い人を出してくれと。とにかく時間をあますことなくかけられ、体力もかけられる、あとは最低限それなりの考える頭があればきっと成していけるということを、私自身がそう思わないと、私がおのおのいていると始まりませんので、そこでやってみようということで、若い人を出してくれませんかとお願いをし、半年という時間限定で始まってきたと覚えています。

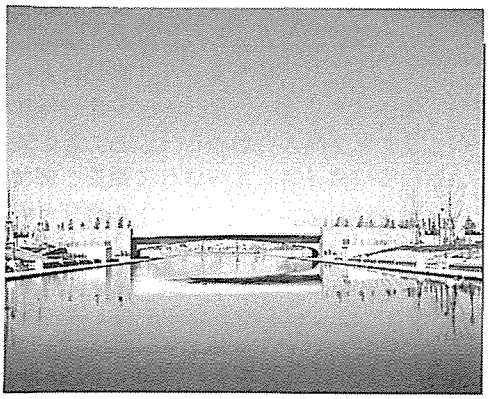
（樋口　忠彦）
池田さんはあのころ何歳くらいですか。

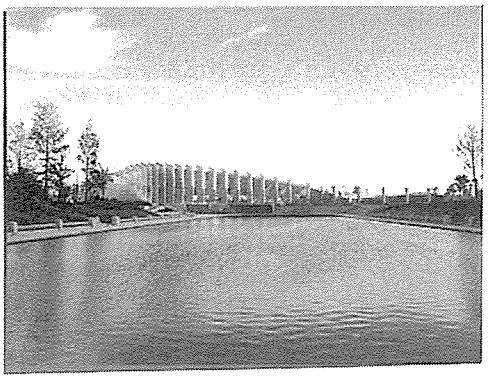
（池田　博文）
43 歳か 44 歳ですね。

（樋口　忠彦）
そうですね、40 代そこそこで、スタッフは 20 代ですよね。その辺のところが非常にパワーがあって、夢中になっちゃうというところがあって、また面白かったというところもあるのでしょうね、内容として。ここでどんな内容だったかを、皆さんに紹介していただけますか。

（池田　博文）
ここで幾つかの文書が出てくるのが緑化フェアのときのパンフレットで、県のテーマを伝授して、我々が今何を考えなければいけないのか、20 世紀を顧みながら 21 世紀の段階で我々何を感じていきたいのかということで書かれている幾つかの文章です。
基本的には我々の世代が実際にそれを感じて、その中で生きていくという部分として、例えば都市の中の自然というのがかなり希薄なものになっていて、それ自身と日常的にやりとりできるということを、もう１回都市の中で再現しながら、我々が生きていける都市を作らなければいけないのではないかということ。その中で大地の所に都市が作られて、都市の中の一部を緑化するのじゃない、いつの時代の人間も、大地の上に何らかのことを考えながら都市を作っていく、その中でもう一度、我々は心地よく生きられるという視点で、緑化フェアの緑化をとらえていこうというのが、私たちの一番のテーマでありました。
このコンセプトについては、こういうことをこういうふうにやりたいのだということで、樋口先生に何回も私たちのプロジェクト室に来ていただいたり、大学にお邪魔したりしながら、いろいろなキーワードを求めて、最後に辿り着いたのが、この大地の庭というテーマでした。
これはかなり古い新潟の地図でありますが、これは緑化フェアが始まった状態で、鳥屋野潟北部ではほとんど都市化が止まっていたところが、これから南部を開発していくという、一番最初のくさびが打ち込まれた部分であります。
たまたま緑化フェアの前に、今カナールという運河、調整池ですが、それがあるところの橋のデザイン、カナール広場、南部と北部を結ぶカナールゲートというデザインを松山さんと、松山さんの所のスタッフの方と模型とスケッチ、模型を何十個作ったかわかりませんが、あとは現地でポールを建てながら現地で様々なことを感じながら作ってきました。最後は、緑地の部分のデザインまで一部させていただいた形になります。
一番最初にカナール橋、それからカナールテント、バイザーゲート、それから大地の庭、これは完全にテントの中で、県の緑化フェアのテーマの展示、企画、運営そのものと、最後がワールドカップの直前に整備されたスタジアムの周辺部という形になります。
その中で今お話があったように、我々は21世紀の都市緑化という概念からもう一つ視点を変えることで、新しい方向性を見つけ

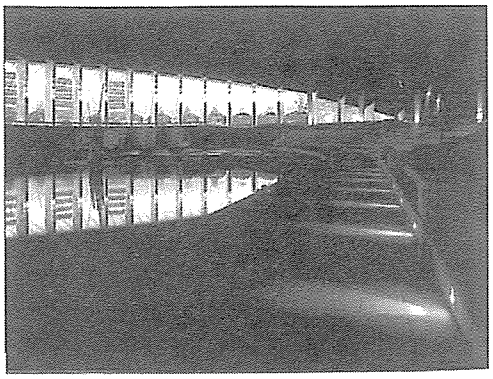


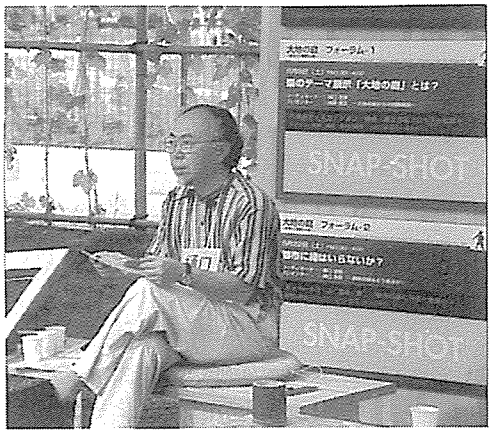




は現物の模型の中に照明器具を仕込んでということで、関わった専門家、緑化デザイナーも含めて、ほとんど若い人たちだけで、喧々囂々のキャッチボールの中で作り上げてきたデザインであると思っております。
これはその中で行われたオカリナのコンサートで、小学生も自ら練習してここで吹いてくれました。テントの中では、「公園はどうあるべきか」ということを来場者と共に語り合うということも含めて、主体的に参加することで感じ取れる内容と、樋口先生にも何回かコーディネーターをいただいて、90日間の会期が終わったわけです。
その際も、ここで作ったものはすべて、一つも廃棄撤去しないぞということで、すべてが別の場所に移されたり、どこかで形を変えて残っているということに今もなっています。残念ながら土柱はボロボロになってきて壊されてしまいましたが。
その中で一部の皆さんにご寄付をいただいた苗木も、これは新津県立植物園の所でありますが、そこに来場者にもう一度集まっていただき、アーチストに記念碑を彫っていただいて、植樹して、最後は本として出版をしましたが、ここですべての緑化フェアのイベントを終えたという形になります。
最後にまとめとして、樋口先生をはじめ様々な専門の先生方に集まっていただいて、都市の緑化を考えるということで記念講演、シンポジウムをさせていただきました。実はこれが我々のやったプロジェクトに対して、樋口先生から名前を付けていただいた「未完のプロジェクト大地の庭」という形で、新聞にもそのように掲載していただきました。
我々はいつの時代にも作ることと同時に、自然にとってみれば破壊ということをどこかで行っていく。今回も鳥屋野潟南部を作ることと同時に、古くからあった風景、景観を一部は破壊していくという、作ることの喜びと同時に一部罪悪感も感じながらも、そこをどう調整していくかを考えていくことが、人間が生きることなんだということを、先生に深く教わり終わったプロジェクトだったと思っております。

（樋口　忠彦）
どうもありがとうございました。
振り返ってみてすごく充実したプロジェクト、イベントだったわけですけれども、これはイベント以上の意味があって、そのプロセスをすごく大事にしたと、それからそのプロセスの中で人が育っていくことを重視したという、そこが松山さんの考え方ではなかったかなと思いますが、振り返ってみて松山さんの感想はいかがですか。





（松山　雄二）
都市をどう生きるかといいますか、それを非常に多くの方が考えられている。そしてまた本当に自分の住んでいる町をどうすればいいかと、これをどう形にしていくかということが大事で、そういった点では、いままでのまちづくりのうまくない所を変えていこうというのが、いろいろな形であるんですね。そういった意味では、かなりインパクトのある問題提起、提案ができたと感じております。
ただ、私は最近のワークショップという考え方について少しだけ意見を持っているのですが、専門の方々のしっかりした調査研究がないとだめです。
ただみんなが集まってやればよくなると、それでまた行政側も、今は特に、住民の意見を聞けば住民参加というのがあるんですが、ただそれだけではうまくないなと。そういった点では、今回アドバイザーに樋口先生になっていただいたのですが、そういった専門の方の参加というか、ビジョンと

いうか、そういうものをしっかり共有した形での取組が大事ではないかと思います。

（樋口　忠彦）
私よりは、関わった人が専門家だったということがあったと思うのですね。ワークショップも、今おっしゃったように難しい局面を迎えていて、今の段階でいろいろなところでやられたということで、反省期に入ってきていると思うのですね。
ですからいつの間にか専門家はどこへ行っちゃったのだろう、あるいは専門家はもういらないのではないかと、そういう議論もされたりしたのですが。
その中でもう一度、専門家は専門家なりの重い役割みたいなものがあって、それを逃げちゃいかんのではないかという感じがします。
そういう意味で、専門家は専門家なりに責任を持った案を出していかなければいけないのでははないかという感じがしますね。
それを置いておいて、みんなで考えて出てくるのを待ちましょうと、それだけだと、やはりあまりいいものは出てこないんじゃないかなと、何のための専門家かというのが問われているのかなという感じがしないでもないですが。
池田さん、そういう意味でいかがですか。

（池田　博文）
我々も若いスタッフの中だけで進めてきたわけではなくて、専門領域でいうと例えば我々は設計者であり、意匠とかデザインなど、かなりアーチストに近い仕事をされている方がいますし、技術屋さんと言われている方では設備家とか構造家という方がいらっしゃいます。
ただ、20 世紀を見ると、設計する人と作る人が分かれているのが、どうもいまひとつ気に入らなくて、大地の庭をやるときのコラボレーションの中で、ドロ団子とか土間舗装をやってみようといったときに、某ゼネコンさんの道路部の方に、これだけのニガリとかあるいはこれだけの石灰分を入れて、スタビライザーを混ぜてやってみたらどうだろうと、「このことをやってみてくれませんか、こんなふうにしていいのができるかもしれませんよ」というと「やってみようや」と答えてくれる。
ものを作る人が、作ることの中で嬉々として自分の職能をそこに出してみようかという部分が、今、社会経済の中で、どこかで図面があってそれを幾ら以内で作ればそれでよし、最低限の瑕疵を保証すればそれでよいというところで終わっている部分が、その先に作りだそうという部分は、我々設計の職業は大半がそうなのですが、そうやって実際に手を動かす人がいるから設計者としていれるのであって、松山さんがいるから設計者ができるわけではないという部分を含めて、私たちも今のところ、へんな形の中で、20 世紀の中で分裂した役割を持ちはじめていて、それが分裂していておかしくなっているから、またみんなで集まろうと言ってはいるけれども、自分の中で統合していくような、自分を作って生きていくような姿勢を持った人たちが集まらないと、あまり意味がないかなということも含めて、そういう方々の協力もすごくいただいたと。
竹１本にしても、これをワイヤーで吊ってこの強度は大丈夫か、実際にやってみようという部分が様々なものを作らせてくれたかなと思っています。

（樋口　忠彦）
レポートの最後のところで、県内でどこの地域のどんな人たちが関わったかという図面を書きましたけれど、県内のいろいろな所の人たちとのコラボレーション、共同作業でできたという今の話を聞いて、そういう意味では専門領域の図もあって、その中でつながっていたというのがあったらよかったかもしれません。
そういう様々な広がりの中で、本当に理想的に近いコラボレーションができたのかなと思っています。
実際のプロジェクトはなかなかそういう機会がないわけですけれど、今後そういう機会が増えるようにしていかないと、ものは残るだろうけれども、そのプロセスの中で人が育っていくというか、しかも地元で優秀な人が育っていく、それをやらないと、県の力、地域の力というのは育っていかないという感じがします。
発見と育てるというのがありましたが、やはり育てるというのは、人間を育てるというところを忘れないようにしないといけないと思います。
実際の仕事であれば、その仕事をやっている人たちは、そういう意味で育っていくということはあるわけですけれど、それをもう少し広げて、いろいろな分野の人がその機会を生かしていくというか、そういう場としていろいろなプロジェクトを活用していくと、なかなか面白くなるのかなという感じがします。
それが公共事業の役割なんじゃないですか、ある意味で。公的なお金をそういう形で広く還元していくというか、それが非常に広い領域での効果を生み出すという感じがします。松山さんはもう辞められたのでしたよね。

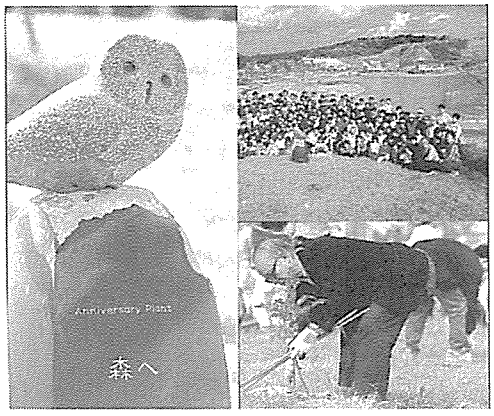
（松山　雄二）
ええ、県は辞めたのですけれど。

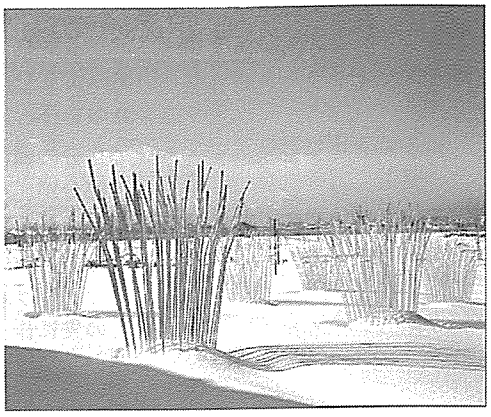
もう１点だけ大事だなと思ったのは、やはりまちづくりにおいては、権限と財源をもっているのは行政ですね、行政の世界で一つのプロジェクトもそうですし、都市全体を管理していくといいますか見守っていく、成長も含めて成長の管理、そのことがちゃんとできる専門の人が必要だろうと思います。今のところ、行政の中をみていますと、大体３年ごとに変わっていくのですけれど、そういった形ではなかなかうまくいかないだろうと。
今、いくら市民参加のまちづくりと言ったとしても、やはりそれは一つのテーマであったり、あるいはある時期だけ力が入るけれども、ずっと時代を継続して町を管理するというのはなかなか難しい。ですから行政の方では、やはりしっかりと専門的にそういったものをバネにしていくというか、そういう一方の充実も必要だと思います。

（樋口　忠彦）
仕事を受ける側として、最後に一言。

（池田　博文）
民間の中で建設業あたりも、篠田市政に変わってから、もう少し体質を変えろというふうに言われているように思います。
ただ、我々の職業、今建設業というのが、どこか根底から問われている。どうもその業界にいる人たちがみんな疲弊しはじめていて、お金は儲からない、辛い、きつい、どうもろくなことをさせてもらえないみたいな状況にいて、これは単に建設業ということだけではなくて、もしかして人間がものを作りだすことそのものが、危機に瀕し始めているのではないかと、最近考えています。
選んで買う、利便性を対価として受けるということ、実際に自分たちが手を動かして作りだすということが、システムの中でどうも一般の社会経済の評価に乗りにくい。そこにある価値とか喜びというのが乗りにくいとすると、今、社会経済の状態がそういうふうに動いてしまうと、それが無視されてくる、そうすると、作ることそのものが誇りであり喜びでありという部分がなくなってきて、そのことからみんなが離れてくる。あとはみんな選んで買うだけという状況にどうも近いぞと。
まちづくりという別な運動が大きく動いている部分と、実際に人間が手を動かしてものを作る、そこを支えている部分の社会は、それはある一部が崩壊するのではなくて、自分の持っているその部分がなくなっていくのだというふうに最近痛感しています。
現場に行くたびにそうなのですが、職人さんといかに楽しく、気持ちよくものを作りだすか、知恵を出し合えるかという、そこにある喜びがないと、都市を壊してだめにしていったのは土木屋と建築屋だけだと言われるのも悔しいというふうに思って、最近は、そこの部分に関して、もう一方人間が持っている、参加して体を動かすということの中での、自分の意志でどう作っていくことか決めるということと同時に、自分が実際のその中の作業をやる、手をもってそこで作り出すことができるのだという、人間の中には二つあるのだと、社会的な役割の別け隔てない、自分の中で統合していけるような社会のシステムに変わっていかないと、どうも産業だけ見て、こちらは大転換という構図の中にはまってしまってはいけないのかなと思っています。

（樋口　忠彦）
最初アドバイザーということで、アドバイスするだけで済むのかなと思っていた話だったのですが、ますます巻き込まれて、非常に面白い楽しい充実したプロジェクトになって、私としては非常にいい経験ができたと思っています。
幸い、去年建築学会北陸支部の建築文化賞をいただきました。私は全国に出してもいい線いったのではないかと思っていました。地域で非常に地道に、しかも質の高い仕事ということで評価されたのではないかと思います。そういう意味では貴重な体験をさせていただきまして、どうもありがとうございました。今後ともまたよろしくお願いします。





新潟の町の価値を育む（新潟下町を楽しむ）

樋口　忠彦

HIGUCHI TADAHIKO
京都大学教授

野内　和裕

NOUCHI KAZUHIRO
にいがたなじらねっと

横山　裕

YOKOYAMA YUTAKA
（財）新潟観光コンベンション協会

（横山　裕）
第１部にありました、樋口さんが夕日コンサートを立ち上げた思いとその実戦力というのは、町を大切にしていくうえですごく重要だろうと思っていますし、大地の庭のプロジェクトの中で、作るプロセスが人を育てていく。やはり町というのは人がいないと生き生きしてこないというところも、その中から学び得たと思っています。
第２部ではかなり専門的な話が中心になってきたところがありますが、新潟の町の価値という、一番大きなタイトルの部分を少し進めていきたいと思っております。
こう言うと先の方々に少し失礼ですが、だんだん年齢が若くなってきまして、第３部では、樋口先生と対談をするというよりは、いろいろご意見を伺うという感じになるかもしれませんけれども、野内さんと私で、樋口先生からレクチャーを受けるという形で、進めていきたいと思います。
少し堅い雰囲気なので、野内さんが出づらいような感じがありますけれども、町の魅力というのは、難しい言葉ではなくて、街をどう使っていくか、そこから感じられるものは何かというところを考えていく。できたものがどうなのかということではなくて、今ある町の匂いとか香りとか、そういうものを探す作業だろうと思っています。
野内さんは「なじらねっと」というＷｅｂサイトを運営しておりますけれど、にいがた寺町からの会の活動を一緒にやっている者として少しお話しいただき、樋口先生も「にいがたの下町学」というのを続けておられますので、そういうところで意見交換をしていきたいと思います。
野内さん、よろしくお願いします。

（野内　和裕）
先ほど、うちの母がたまたまダイエーの帰りに通りかかりまして，「あんた、何してん？」と言われて「何かここで話をするみたいなんだけど」と言ったら「あんたがけ？」と言われて「だれと？」と言うから「樋口先生という人らしい」「だれ？　それ」と。
そんなような認識の人間ですので、申し訳ございません、どんな話ができるかちょっと心配ですが、よろしくお願いします。

（横山　裕）
万代橋景観照明、ちょうど私が大学４年のときに、多田さんと一緒に募金箱を作って、わけも分からず街頭募金をしましたが、今は皆さん当たり前に思っている部分があると思いますけれども、そういう試みの中で、町というのは今も生きつづけているというところがあります。
そういう中で、最近特に下町というのが脚光を浴びていますので、では実際に下町の魅力って何だろうというところを野内さんの方から少し。下町といっても知らない方もおられるかもしれませんので、野内さん風下町の見所とかポイントとか、素敵な所を紹介していただきたいと思います。

（野内　和裕）
「にいがたなじらねっと」というホームページを５年半前に立ち上げまして、何でこういうことをやるのか聞かれたときに、つい最近までは自分でも何でしているのかよく分からなかったのですけれど、多分これは、インターネットというツールを手にしたからだと思うのです。
私は日記を書かない人間ですが、日記を書いたりとか自分の好きなものを集めたりとか、そういうことをしている人間というのは、何かどこかにそれを見せたいというか、発表したいという気持ちがあると思うのですけれど、
今まではそれはだれかに、新聞の方とかテレビの方とか、自費出版で本を出すとか、そういう方法でしか発表できなかったことが、インターネットを手にして、そこに自分の好きな風景を載せていくうちに、あれこれといろいろ調べたり、遊んだりするようになったページがこれなんですね。
何せすぐに飽きる人間なので、猫の写真とか夕日とか、いろいろなものを撮ってはいたのですけれど、１年間は夕日にものすごくはまって、夕日の写真ばかり撮ったりとか、その次は猫の写真を撮って猫のページを作ったりして、非常に飽きずに作れたのですね。何かこれがどれか一つだけだとすぐに飽きてやらなかったと思うのですけれども、だからネットを続けられた秘訣は、いかに自分が飽きずに楽しんでやるかというところだったと思うのですね。
先日、初めて樋口先生の下町学にお邪魔させていただきまして、その中で樋口研の皆さんが、いろいろな角度で下町を調べてくださった発表会にお邪魔させていただいたのですけれど。
非常に似ているなと思ったのは、切り口は違うんですけれど、一つのものをいろいろな切り口で見るということ、それが非常に楽しいものだなと思いました。私も今になって気が付いたのですが、町の猫とか銭湯とか海とか、そんないろいろな切り口で見ていって、いつのまにかこれだけのコンテンツになったのですけれど、樋口研の皆さんが調べたのも町屋の分布とか、下町という一つの素材が、いろいろな面から見れるのは面白いと思ったんですね。
その中でこの前の参加者の方から、下町の人情というのを調べて発表してくれというような発言があって、岡崎先生でしたか、

自分たちは工学部で数値で人情を出すのは難しいですねという話をされていたのですが、私もそれを聞いていて何か方法はないかなと思って、今回、こういう切り口も面白いかなと思ったんですね。

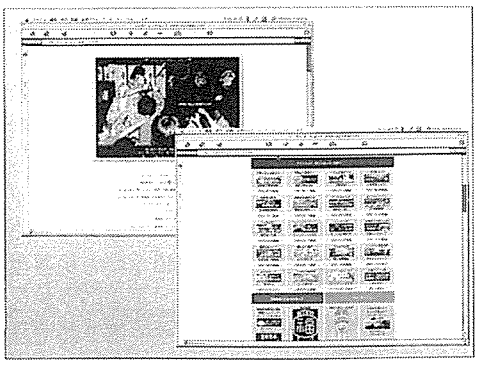
「花」、これはご存じの湊稲荷神社ですけれど、こちらの満開の花がある場所とか、これは東堀通 12 ぐらいでしょうか、何とか小路というんですけれど、非常に花がきれいなんですね。これは家のすぐ前ですが、これは何という花か分かりませんが、これから6月初旬までの時期というのは、下町というは花の町というか非常にきれいなんですね。下町だけじゃないかもしれませんが、下町の花の特徴というのは、人の手が入った花が多いような気がするのです。植木鉢とか、椿をきれいにしたりとか、そういう所をピックアップするだけでも、何か人の気配が感じられるような気がするのですね。

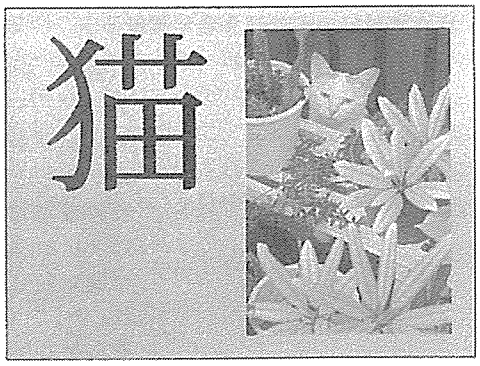
それと「猫」という目で見ているのですけれど、下町で気が付くのは、老人が多かったり、猫が多かったり、銭湯がたくさん残っているとか、昔から人が住んでいて、多分ゆったりとする空間があるんじゃないかと思うんですね。

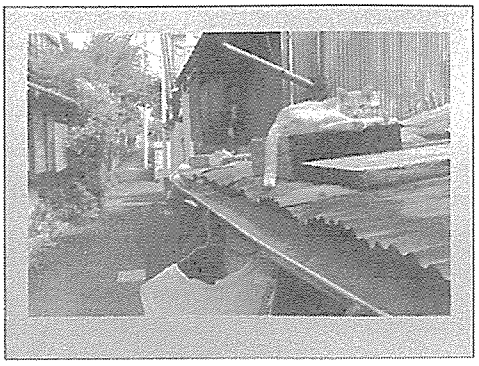
貼り紙というので下町を見るのも面白いんじゃないかなと思います。これは要約しますと、お年寄りの方たちが一人で行くのは大変だから、みんなで集まってマイクロバスを借りて旅行に行きましょうという貼り紙がしてあったり、「犬に食べ物をやらないでください、病気です」とか、こういう貼り紙がとにかく多いんですね。「急告猫のノミ大発生。ここで猫に餌をやらないでください」とか、冬に見たのですが、いつ発生したのかよく分からないですね。

また「迷い猫。湊小学校付近で迷っていました。心当たりの人、下記まで連絡してください」などと書いてあって、特徴が「オス、太っている、なついている」これだけではどこの猫か分からないですね。これらを見てすごく思うのは、これを書いた人間、下の人たちというのは非常に面白いと思うんですよ。

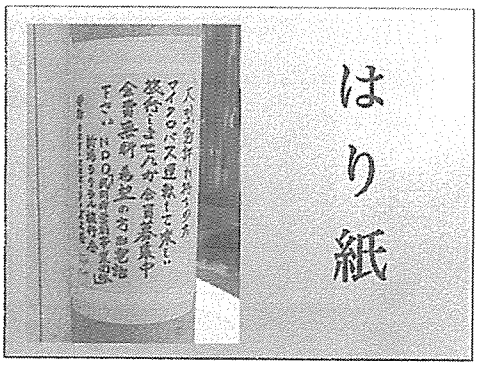
「アロエ、よろしかったらお持ちください」と、これは家の前にアロエが生えていて、勝手に持っていっていいということなんでしょうか。それからこれは「あじさいが枯れます。犬におしっこをかけさせないでください」、あじさいがここに生えているんでしょうけれど、手入れしているのに枯れちゃうんでしょうか。こんな看板を立てたり、その脇に「カラスの墓　親分の縄張り争いから空中戦あり。急降下し遂に戦死、ここに霊を慰めんと。下町一町内会」と書いてあるんですね。このセンスは素晴らしいと思って思わず撮っちゃったんです

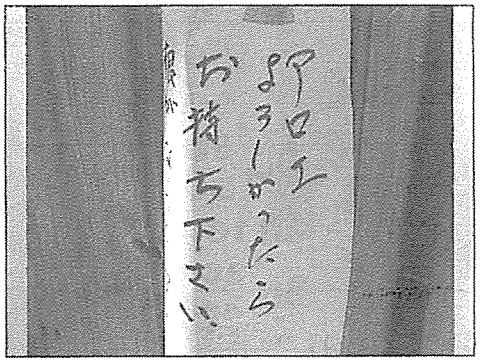


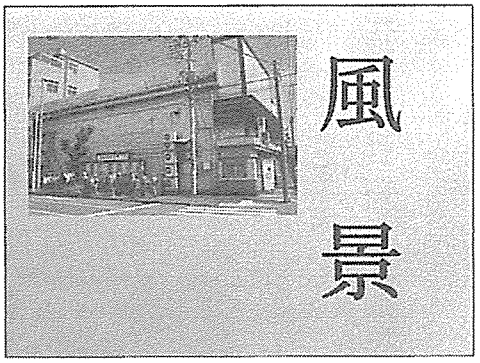


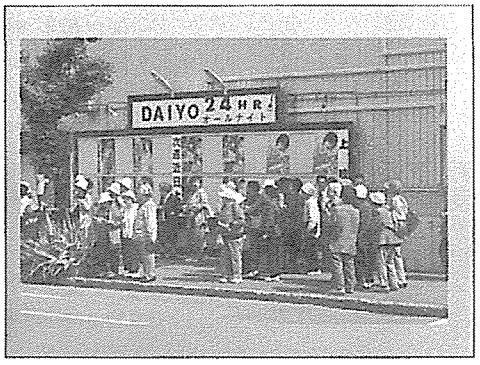


が。
これは空き地に野ざらしになっている剥製ですか、ご自由に持っていってくださいというものらしいのですが、こんなものがあったりします。ここから感じるというのはすごく難しいかも知れませんけれど、こういう文章力というか、感性のある人たちというのは、これは下町の人情として、確かにこれが書いてある場所というのは限られてくるので、それを分布すると人情分布マップのようなものが作れるような気がするんですね。
風景となると、これは大要劇場でございますが、24 時間オールナイトの前になぜかオババがたくさん集まっていて、大要って流行ってるんだなと思うんですが、これは実は、どこかに旅行に行く前に、下のおばちゃん達が集まって、ここからバスに乗ってどこかに行くらしいですね。
私が「なじらネット」というホームページを始めたきっかけは銭湯でして、これはこんぴら通りにある、ことぶき湯さんという銭湯なんですが、一通り新潟市の銭湯をぐるっと全部回ってみたんですが、銭湯が残っている風景というのは何か懐かしい。そこで気が付いたのは、それがある場所というのは新潟市だと新潟島、下町周辺、それから沼垂、山の下ということになると思うんですね。何か自分の興味のある切り口で町を見ていくと、非常に一つのものが何回も楽しめるということに気づいたんですね。
これは日和山の展望台ですが、私、すごく日和山展望台が大好きで、そこから見る一番好きな風景というのは、夕日もそうですけれど２月ごろの荒れた海なんですね、こんなときに上がっている人はいないんですけれど、カメラも電池が止まっちゃうくらい寒い所で、こういう風景を見たりとか、これは元旦に上がって撮った下町の風景です。日和山展望台の上に上がるということは、定点観測ができるんですね。同じ町の移り変わりが、この写真でいえば朱鷺メッセが建設中だったり、前はなかったですけれど。これは赤坂町にある鈴木さんという家に乗っている狛犬です。これは開運稲荷神社の狛犬で、非常に表情が面白い。こういうのを集めて撮るのも非常に面白いと思いました。
先日、新潟石仏の会の方たちと会ったのですけれど、どの辺を回りますかと聞いたら、下町も行ったと、お地蔵さんの由来なんかは分からないけれど、狛犬とかお地蔵さんの表情を見るのが好きで写真を集めているという人がいまして、そういうスタンスも面白いと思います。これは有名な回る狛犬です。これは湊稲荷のお稲荷さんで、何かひょうきんな感じですね。
それから一つ思ったのは、下町にはお地蔵









さんが多い。これは水戸教公園という、みなとトンネルの近くにある小高い丘で、ここに沖見地蔵さんというのがあるんですけれど、こんなのがまた表情がよかったり、この歴史的背景を知ってもまた面白いですね。

これは並木町にある延命地蔵です。これらが放ったらかしになっているわけではなくて、その日になるとこの近所のおじいさんおばあさんが集まって、みんなでご飯を食べたり、お地蔵様を拝んだりしています。

これは浅草観音堂といって東京の浅草寺からのものだという話ですが、このようなものがちゃんとお祭りとしてあったりしています。

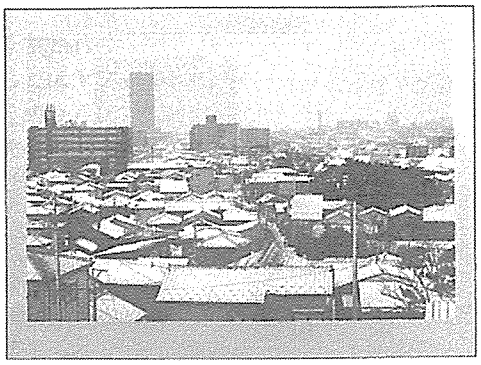
これも浮洲興源寺というお寺ですけれど、河川歴史慰霊塔という歴史に基づいてのものがあったり、私はここに彫られているお地蔵さんの表情が非常に好きで、これをアップにして撮って喜んでいたのですが。

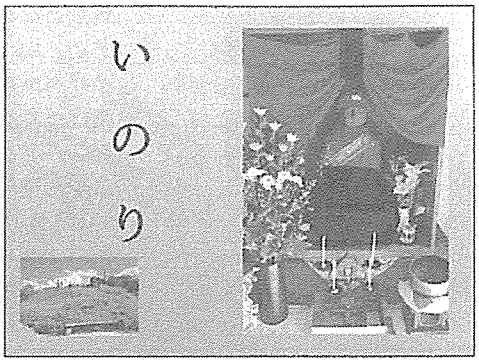
これは日和山の共同墓地です。全然知らなかったのですが、キリスト教徒の方のお墓があったりとか、不思議な雰囲気を持つ場所ですね。寺町からの会でここを調べるようになったら、有名な荻野久作さんのお墓があったり、竹山病院の竹山屯（たむろ）さんのお墓とか、この前銅像が建ちましたが、名誉市民の澤田敬義さんのお墓があったり、下町というのは興味の持ちようによっていろいろな方向で楽しめると思ったんですね。

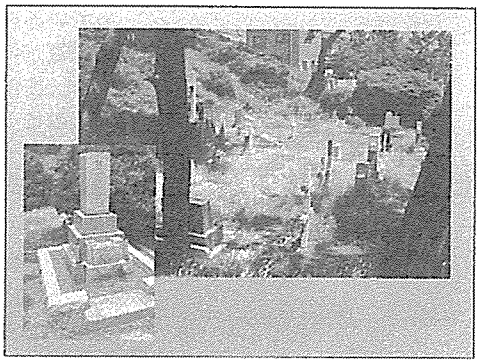
これは祭、昨日もこんぴら神社でお祭りをやっていましたけれども、下町で一番好きな風景というのは、お祭りに集まる子どもたちの表情でしょうか。これはこんぴら通りのこんぴら様で、餅つきをしたり踊った後に餅をまいたりしています。下町らしさが一番残っている場所はどこかというと、もちろん町屋とかの建物などもあると思うんですが、こういうお祭りというソフトがちゃんと機能している場所というのは、一番の魅力のある場所なんじゃないかと思います。

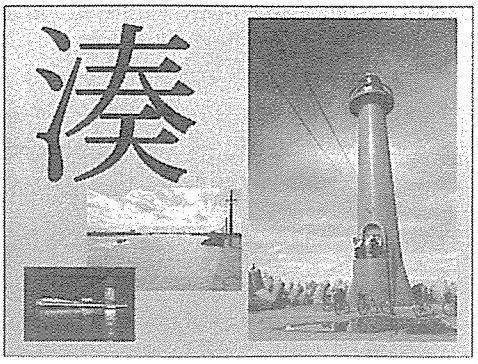
これは附船町にあるもう一つのこんぴら神社ですけれど、宮司さんがいらっしゃらないので、最近はあまりお祭りをやっていないんですが、こちらはいろいろ調べてみると、銅像にある鈴木セツミさんという方が、今の新潟甚句をまとめて踊り方とか歌などを整備された方だというふうに聞くと、この鳥居と、半分崩れているような建物しかないのですが、ここも素晴らしい場所だと思えるようになったりします。

私の好きな風景というのは、日和山の展望台とともに、新潟の西突堤の一番先に赤燈台がございまして、一番上には上がれないんですけれど、真ん中の辺りには上がれるんですね、ここから見る新潟島の風景とい

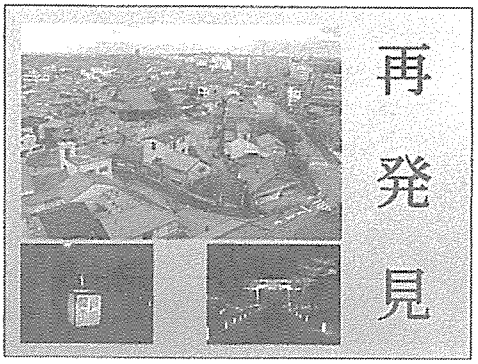


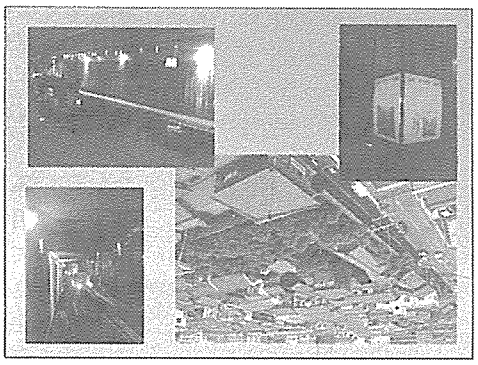


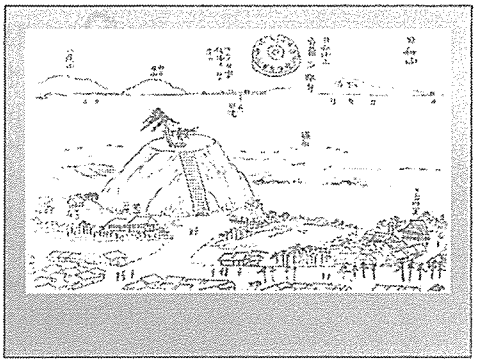




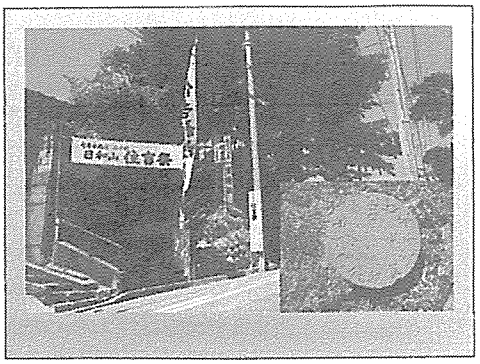
うのがものすごく好きなんです。だから、この前も初めて朱鷺メッセの展望台に上がらせていただいたのですが、確かに眺めはいいんですけれど、何か一つ足りないと思ったのは、潮の匂いとか風とか、体感できるものがガラスの中だと違うなと。どちらも好きですけれど、下町を見る一番いい場所というのはここかなという気がします。
今までネットの中で発表しているだけで、一人しゃべりみたいなもので、たまに反応があるものですから続けて楽しんでやれるのですけれど、寺町からの会とか下町ウォークのように、実際に動いて町の中を楽しむお手伝いをさせてもらったときに、こういうデジタルな手に触れない活動だけではなくて、手に触れる、足を使う、こういう活動をするのは楽しいなと思い始めることができました。
このように小沢邸のライトアップとか、これなどは横山さんたちの努力で素晴らしいものができたのですが、私が非常に嬉しかったのは、三芳悌吉さんという方が下町の物語を書いてくださった本を、まちものがたり灯籠などという形で作って、確かに本を買って読めば話は早いのですけれど、このときにすごく私がこだわってそうしてほしいと思ったのは、これが描かれた場所にこの灯籠を置いてほしかったんです。
本を見て、地図を見て町を歩くこともちろん大事なんですけれど、その現場で今と昔を比べてほしいと思って、それがまた灯で照らされたというのは、非常に嬉しかったと思っています。
例えばこんなふうに、まちづくり推進課の方が小路の地図を今年出されましたけれども、そういうのを今年の下町ウォークに生かせませんかと相談をしてみたのですが、なかなか暇な人間がいないとこういうことができないので、実際、下町ウォークで歩くときに、こういうのがあるとガイドはすごくやりやすいですね。こういうことも自分たちでやってしまえばいいのではないかと思って、これはゲリラ的に貼ってしまったりしたのですが。
それからネットとか寺町とか下町ウォークとかいろいろなものをやっていた中で、これは私の夢みたいなものですが、日和山というのが新潟にありますが、これは昔の名所絵葉書というところに必ず描かれたりしているんですね、これは現在の日和山の展望台です。実際、日和山というのはどこかというと、こちらを思い浮かべる方がたくさんいらっしゃると思うんですが、郷土史の本などを読むようになって、江戸時代に書かれた日和山の様子というので、こんな絵図を見ますと、こんなふうに書かれていたところが、下町にあるんだなというのでどんどん調べていくと、全国に日和山とい

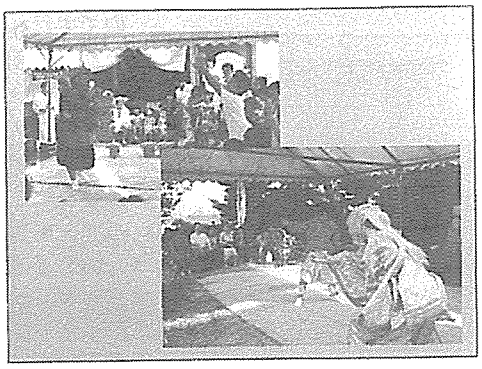


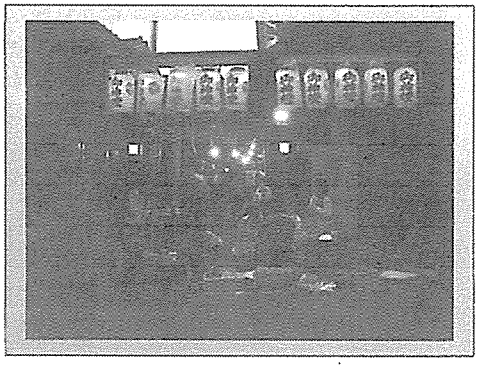


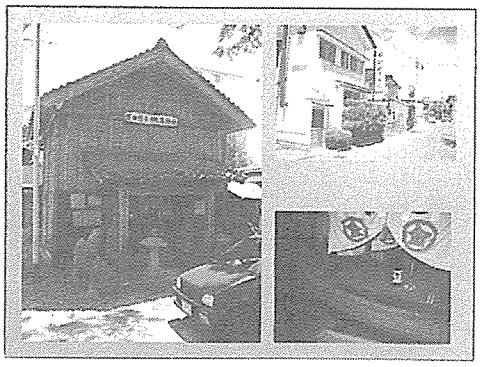


うのがたくさんあるらしいんですね。
南波マツタロウさんという方が法政大学出版から出されている「日和山」という本を読んでみると、その方は東京の古書店でこの地図を見つけて、それから全国に日和山はどんな所があるんだろうかという研究を始めたと書かれていまして、自分の住んでいるすぐそばのこの日和山が、その研究の発端になった場所なのに、案外知られていないのは残念だなと思ったりしたんですね。
ここが今どうなっているかというと、このように小高い山で、全然比べようもなく目立たなくなっているんですけれど、こちらに日和山方角石と書いてありますね、これと同じようなのが、二代目らしいですがあったり、本などで見たものが本当にそのまま残っている場所が、下町の魅力かなと思うんですね。
これが7月 17 日に日和山の山頂でやられていまして、これは海運稲荷という神社の方が管理されていますので、住吉祭というお祭りの中で、お神楽とか、子どもが喜んでお餅を奪い合うような、私の好きな風景とかあって、そういうので何か新潟の日和山をもり立てることができないかなと思ったんですね。
南波先生の本の中で、新潟と一番近い所で日和山がないかと思ったら、山形の酒田に日和山公園というのがございまして、これはいかに家族をだまして、山形に旅行に行こうなんて行って、家族もどう思ったのか、よかったよかったとみんなで行ったんですが、私は、ここに行きたくて日和山公園に寄ってパシパシ写真を撮って、同じように方角石があったり、あそこは千石船が浮かんでいたり、日和山公園という形でものすごく整備されているんですね。
近所を歩いてみましたら、やっぱりこんぴら神社というのがすぐ脇にあったり、この小さい船の絵は、奉納の和船模型らしくて、新潟の下町にあります、こんぴら神社にも同じようなものがあって、やっぱり酒田も新潟も同じような所があって、同じような歴史があるのに、随分生かされ方が違うなと思います。
ちょっとこの上の方にも日和山ホテルというのが出ていて、ここもホテルっぽいところがたくさんあって、これはもしやと思って歩いている人に聞いてみたら、「この辺は昔遊廓でしたか」と聞くと「そうだ」というんですね、やっぱり。
そうすると、新潟の日和山のすぐ脇は本町14 番町でして遊廓があった場所で、私はもちろん行ったことないですが、うちの親父が行ってきた話を聞いたりしましたが、酒田、新潟を比べても共通点があるんですが、この生かされ方が非常に違う。新潟の日和山はもったいないなと思うんですね。

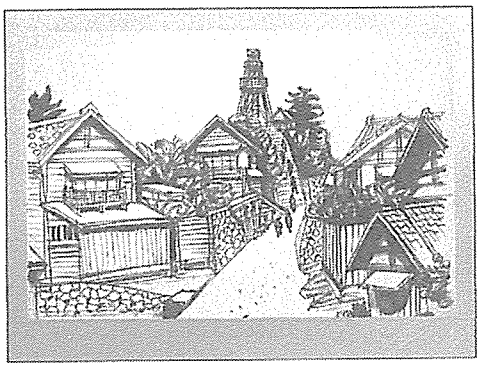




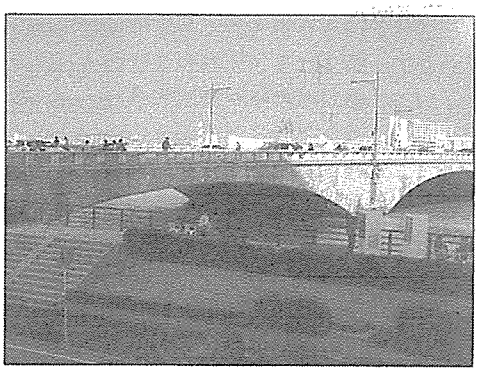




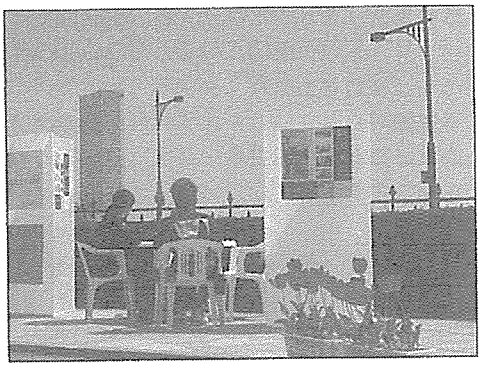
今まではネットの中だけでお祭りがいつありますよとか、歴史的なことを紹介できたらなと思ってやっていたのですけれど、今度はそこから出て、１歩進んでここのお手伝いができるような活動ができたらいいなと思っております。
これは先ほどお話した三芳悌吉さんという方が、「砂丘物語」に描かれた日和山の昔の様子です。こんなふうに櫓が立っているんですね。三芳悌吉さんのお話の中ではやぐらに上がった話が出ていたり、私は堀が埋まった後に生まれている人間ですから、知らない、見たことない、触ったことがないものはあまり語れないと思うんですけれど、是非こういうものが、何かの形で現実化出来たらいいなと思っています。
ただ、あまり頑張らずに楽しみながらやっていけたらいいなというのが、今現在の状況です。



（横山　裕）
今、野内さんに話していただいたのですが、野内さんと一緒に寺町からの会の活動をしていくと、町というのはこういうものだなということを改めて感じさせてもらったというのがあります。
大学２年のときに、樋口先生に「都市計画」という教科書を買わされて勉強した記憶がありますけれど、都市計画で学んでいた町と、野内さんと一緒にやっている町の違いがあることを大きく感じまして、大事にしていかなければいけない町というのはどっちなんだろうということを改めて感じました。



それは、専門家が作るのではなくて、町をどう使っていくか。昨年、寺町からの会であかりムーブメントというのを、今日おられます稲葉さんからアドバイスをいただきながらやりましたけれど、それもライトアップということではなくて、光で浮かび上がるもの、最後には町の匂いとか香り、先ほど野内さんは潮の香りと言いましたけれど、そういうものをどう大事にしていくか、その辺りが町の香りとか誇りなんだろうなと思っています。
先ほど松山さんが専門家の役割という話をされました。ではソフトだけあればいいかというとそうではなくて、そういう場所をどう使っていくかというところでの、コラボレーションが大事なんだろうと思っています。
そういう意味で、今回寺町からの会で企画しまして、ゴールデンウィークと５月 10、11 日の６日間、ここホテルオークラさんの前でオープンカフェというのを実験的に行いました。
これは新潟大学の岩佐先生にも加わっていただきまして、寺町からの会と建築家とし



ての専門家の協力で、実験的にやろうという試みでした。

先ほど少し触れましたけれど、17、18 年前に募金活動をして万代橋に照明をつけようと、照明をつけることによって、万代橋を町の中で意識していく、そこから川に対して町が開いていく、それまでは多分、川を背にして町ができてきたと思いますけれど、灯を点けることで、町が川に対して意識を始めたということがあります。それをもう少し生かせないかなと考えたときに、万代橋を眺める場所をどう心地よくしていくか、それがソフトなんだろうなと思います。

そういう意味で、今回は実験的にオープンカフェという形で行いました。

この会場であるホテルオークラさんからも協力をいただきまして、そういう意味で市民活動と行政と、ホテルオークラさんという民間企業が協力して行った実験的な試みで、こういうものを育てていきたいと思っております。

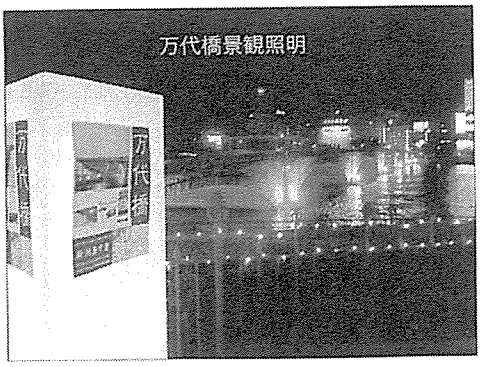
その中では、普段何気なく過ごしている緑地の所にも椅子やテーブルを置くことによって、人が滞在して少し気持ちがよくなったり、そこではこういう形でギターを演奏してみようと、そうすると、普段は早足で通り過ぎるところも、チラッと横を見て、歩くスピードが少し落ちてきたり、そういう中で町を感じたり、やすらぎ堤にもこういう形で少しゆったりできる椅子やテーブルを置くことで、より万代橋の魅力が感じられたりということがあるかと思います。

これは５月３日に行ったのですが、その中でカルテットが演奏しました。何か外国の都市に遊びに行っているような錯覚をおこさせることが新潟でもできるという、一つの事例かと思っています。

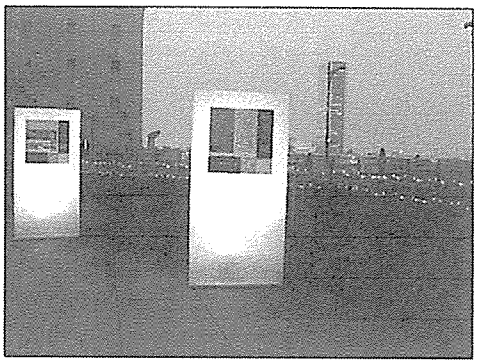
また、バルーンアートを実験的に仕掛けたりとか、そういう形で町をどんどん楽しく使っていくとか、その中で大事にしていくものを意識しながら、どんどん動いていかなければいけないということは、第１部で樋口さんの方から夕日コンサートを立ち上げたときのお話をいただきました。

それは考えてだれかにやってくれと言うのではなくて、自分たちから楽しんでやるということが、町をよくしていく活動なんじゃないかなと、そういうことがまちづくり、町を育てる活動なんじゃないかと最近思っています。特に大学を卒業してから、そういうことの重要性を樋口先生から学んできたというところを、少しずつ実践しているということです。

大学のときは、あまりそういうことを学ばずにきたような気もしますけれど、町をどんどんよくしていくというのは、何か新しいものを作るとか、ハードをどう作るかと



かそういうことではなくて、今ある町を見つめながら、そこにある潮の香りとか、先ほどの話のように猫の鳴き声とかというものを大事にしていく、そういうことがまちづくりなんじゃないかなと思っています。
そしてそれが新潟の町の価値を高めていくということで、次の世代に今の新潟の町の良さを伝える試みなんじゃないかなと思っています。
今日、夜6時から点灯しますけれど、普段は暗闇の中でこんな所歩くかという感じですけれど、こうして光をつけることで、少し違う町の印象を提供していきたいと思っています。
そういう話を踏まえて樋口先生の方からレクチャーというか、なかなか対等には話せないので、よろしくお願いいたします。



（樋口　忠彦）
野内さんの話というのは非常に面白くて、都市景観とかいう本がありますが、そういう中には大体載ってこない話ですよね。都市景観のマニュアルとかというと、街路樹を植えましょうとか、歩道のペープをもっと快適なものにしましょうとか、あるいはランドマークをどうこうとか、どちらかというと根底にはヨーロッパの都市に憧れるというのがあるんでしょうけれど、そういうものを日本にも作っていくのが都市デザインだというところがあったのだと思います。そういうところに、野内さんのような方からズラズラっと並べられると、いわゆる都市デザインというのは何だったんだろうかということになるわけです。
日本でも実はこういう動きがなくはなかったわけで、探偵団とか、そういう流れに近いんではないかと思うのですが、本当に日常の世界を触覚で感じ取っていくそういう世界を出してきた。
それは 1980 年代だと思いますが、ただ遊びということがあったんですけれど、今の野内さんのものを見ると、遊びでもあるけれども、それが実は下町の魅力を、今まで分からなかった魅力を五感、すべての感覚で感じ取れるという、そういうものではないかと思います。
ヨーロッパの都市デザインとか景観というのは、非常に視覚にこだわるんですね、ビジュアルな世界、フランス人で景観を勉強しているオギュスタンベルグさんに新潟大学に来て講演をしてもらったことがありますが、彼は日本人の風景観というか見方は、多感覚的だというんですね。五感とかそういうふうに言わないところがなかなか面白いんですが、多感覚的なとらえ方をする。
それは非常にユニークだということを言っていて、やはりそれは本当にユニークなのだろうと思うのですが、我々学問の領域にいると、ついヨーロッパ的なものの見方で見てしまって、そういう形で町を作っていくのが都市デザインだと思うというところがあったのですけれど、それを破ってくれて、もっと身近に我々が本当に感じている世界というのを感じ取らせてくれたというところじゃないかなと思うんですね。
今、京都にいるんですが、今話に出たお地蔵さんとかお稲荷さん、弁天さんとか、これは街中いたるところにあるんですね。異様と思えるくらい、そこかしこにあるわけです。そこには必ず花が上がっているし、必ずそこで掃除をしている人がいるし、それがいつもきれいになっている。そしてそれを信仰している人がちゃんといるというような、これは歴史が長いから、そこにずっと住んでいる人たちが作りだした風景なんじゃないかなという印象でいつも見ているのですが、下町も、京都よりは新しいかもしれないけれどもそれなりに長い歴史を持っていて、そういう生活が作りだした風景なんだなと。それには共通したものがあるなという感じがします。
日常の庶民の生活というのが、そのままもろに出てきている、そこに面白さがあるということではないかと思います。
そういう所に着目していって、地域の持てる魅力というのをとらえ直していくというのは大事だと思います。それは郊外の振興住宅地では絶対にない風景なわけですね。郊外にもそれなりの特徴があると思いますけれど、下町には下町にそういう特徴があって、野内さんはそういうのをよくとらえているんじゃないかなと思います。
それから横山君は、実際にものを作るというよりは、彼と話をしながら景観というのはものを作るんじゃなくて関係を作るんだということを言っていて。
その辺、これからそれをどういうふうに具体的に環境を作っていったらいいのだろう

かということで、いろいろ工夫をしているのではないかと思うんですね。
ついつい景観というと対象が景観だと思ってしまうのですが、そうではなくて、それを見る人がいるから見えるわけですね、見る人がいないと景観は存在しない、あり得ないわけですから、人と対象との関係が景観なわけです。その関係を活性化するというか、そういうことをやっているのではないかと思うのです。そういう意味で非常に面白いです。
樋口潤一さんの夕日なども、夕日というのは当たり前にあるわけですね。それと市民の人たちとの関係のつけ方として新しいものを提案したわけです。それで今は数万人の人を集めているのですが、そういう風景に育ったということだと思います。
ポイントは関係を育てていくということだと思います。対象そのものも操作できるし、見る場所そのものも操作できるし、見る人も変えていくことができるというか、先ほどいろいろ示したものを見て、皆さん感じるところがあったと思うんですね。そうすると、そういう見方で下町とか自分の住んでいるところを見るようになっていくというのがありますね。
ですから面白いなと思うと、それをそういう目で見ていくということ、そういう人というか感性を、彼は育てたということにもなるわけです。
そういう関係をできるだけ豊かにしていくと、いろいろな複雑な関係はたくさん出てくる、そうすると、そこは魅力のある場所なのではないかと思うんですね。
住んでいる人とそこにいる人との関係、非常に濃密な関係が、いろいろな所に出てくると思う。そうすると環境と自分との関係がすごく親密なものになってくる、そういうことではないかと思います。
親密でないという関係もあるのですが、できるだけそういうものを除いて、池田さんたちが言った居心地の良さという概念がありましたが、そういうものをできるだけ押し広げていくような関係を作っていくとすれば、素晴らしいなとか、美しいなとか、ほれぼれするなとか、いろいろな感情があると思いますけれど、そういうように人の感情に響くような感情をうまく育てていくということが、まちづくりの面白さなのではないかと思います。
今までまちづくりというと、道路を作ったり、土木的な工事をやったり、あるいは建築を作ったりとか、そういうことに力点が置かれていたのですが、それはある意味で対象を作るということなんですね。それだけではなくて、それと人との関係をもう一度見直して、それを豊かにしていく、そういう時代になってきたのではないかと思います。
野内さんがいろいろなイベントをすると、けっこう人が集まるしょう？
灯籠にあかりをつけたりとか、ああいうのもけっこう多くの人を集めていたし、よそからもたくさんの人が、新潟以外からも来ていて、すごく感心して帰っていった人たちもいました。何とかメッセとかそういうものが出来たという魅力もあるけれども、それともっと違う、ジンとくるというか、肌に感じ取れるような人と環境との関係、そういうものの創造というか、あるいはその関係の発見とか再発見みたいなものにすぎないのだけれど、朱鷺メッセ以上の価値を持っているかもしれないという感じがします。
ただ、朱鷺メッセも使われていけば、そういう人との関係というのは生まれてくるとは思いますけれど。今、野内さんが示したようなものに近い関係というのは、なかなか生まれないんじゃないかという感じがしますので、そういう意味で、非常に面白い試みを若い人たちが始めているということで、私も新潟を去っても大丈夫なのかなというふうなところです。
時間も４時に近くなりました。長い間、いろいろつまらない話をしましたけれど、私もそういう意味で、こういう人たちに恵まれて、いい仕事ができたと思っています。
今後ともできるだけこういう形とかいろいろな形で接触をしながら、コラボレーションしていきたいと思っています。
是非とも京都の方にも来て、京都の町の魅力は何なのか、あれだけどうして観光客を集めてしまうのか、それの意味を探る必要があると思いますね。それは、東京が人を集めるのとは違う意味での人の集め方、魅力ですね、そういうものをもう一度見直していく必要があるかなと思っています。そういう意味で新潟と京都の比較研究とか、そんなものもやっていったら面白いなと思っています。お互い何が欠けていて、何が優れているのかというのが分かって面白いのではないかと思います。
一般の社会と違って、大学というのは結構横の関係が非常にスムーズに動く世界であります。アカデミックな世界で、常に研究発表会ということでお互いに討論をしながら仕事を進めていく所であります。
ですから私が移るということは、私が物理的に移動しただけの話でありまして、いろいろな接触とかコミュニケーションというのは、いくらでも続けることができるのではないかと思っております。そういう意味で、今後ともお忘れなきよう、よろしく私も仲間に入れていただければ有り難いと思います。どうも長い間、ありがとうございました。

第13期定例総会

柳田 良造
YANAGIDA RYOZO
代表幹事
プラハアソシエイツ㈱

都市環境デザイン会議　第13期定例総会

日時：平成15年7月5日（土）10時30分～12時30分

場所：ＭＩビル25階会議室（東京都品川区天王洲アイル地区）

代表幹事の澤田晴委智郎氏の司会により、都市環境デザイン会議第13期定例総会の開催が告げられ、まず宮前保子より開会の挨拶があった。

「定例総会は２，３年さぼっていたが、この２，３年で世の中変わってきたように思う。自然環境にかかわってきているが、近年自然再生が広く言われてきている。ＪＵＤＩも都市再生とともに、自然再生もテーマになるようにしたいと思う。関西ブロックの海外セミナーで昨年フィンランドに行った。フィンランドでは５０年たつと、建物もランドスケープが保存の対象になるし、素晴らしいデザインの環境デザインをいくつも見た。日本にもそういうストックをつくる文化を育てたい。」

続いて議長に代表幹事の川井由寛氏、書記に柳田良造が選出され、さっそく議事に入った。また署名記録人に伊藤洋氏、松本篤氏が選出された。

１）　第12期活動報告と第13期活動計画

代表幹事の中井川正道氏より、第12期活動報告と第13期活動計画が報告された。

●公募性プロジェクトの件

３件の募集があり、12月の代表幹事会での選考により２件採用された。午後その報告がある。初回で応募数が少なかったが、今後も実施していくので、広く応募が集まることを期待したい。

●会員の減少傾向

第12期も続いている。協力法人の減少は、運営収支上の影響が大きく、重く受け止めている。

●琉球ブロックの立ち上げ

昨年暮れ頃から、琉球ブロックの立ち上げ準備を進めてきて、総会においてその立ち上げを承認いただきたいとの報告があった。

●第13期の活動計画

第13期の活性化策として、以下の点を計画している。

・若手会員の加入
・委員会、ブロック間交流の拡大
・協力法人へのサービス強化、メリット拡大
・他団体との連携
・社会へのアピール、社会貢献
・委員会のマンネリ化の解消
・委員会の世代交代、運営のルールづくり
・退会者のくい止め

２）委員会・各ブロック報告

●広報出版委員会の澤木俊冏氏より、ＪＵＤＩニュースについて、「人と場の活性化」をテーマに、岐阜市、四国、沖縄、佐世保市などブロック会員との協働作業で編集を行い、従来とは傾向の違う紙面を提供できた。特に沖縄には委員会から４人が出向いて編集会議をおこなった。今後ニュースのｐｄｆ化、ＨＰ上での公開をめざしたい。今後も、引き続き「人と場の活性化」の方針で、地域の地道な活動を紹介していく予定で、新たに取材費を計上した。沖縄は第13期でもう一度、取り上げる予定との報告があった。

●事業委員会の中野恒明氏からは、「造景双書」として、かねてより取り組んできた「日本の都市環境デザイン」の１号、２号を刊行したこと。モニターメッセの役割も変わりつつあり、事業委員会の存在意義についても議論しているとの報告があった。そのなかで、各ブロックで今回の「日本の都市環境デザイン」の編集事業を契機に、地域の情報がいろいろ発掘され、さらに出版を続けたいとの意見もだされ、存続の必要性の声があがっていることも報告された。

●ＪＵＤＩ賞委員会の中井川正道氏からは、2004年秋に第２回ＪＵＤＩ賞実施に向けて、今年度開催内容を検討するとの報告があった。つづいて各ブロックからの報告があった。

３）第１２期の収支監査報告・１３期の収支計画の提案

代表幹事の伊藤登氏より、１２期の収支報告があった。質問は特になく、続いて監査役の大塚守康氏より監査報告があった。「正確、適正に行われており、問題ないということを確認し、監査報告を行った。」また１３期の収支計画の提案があり、これに対して、以下の質問、意見があった。

＜質問意見：土田旭氏＞

・１２期、１３期の予算をみると、繰り越し金の扱いに注意し、来期赤字にならないように、気をつけて運営することを望みたい。

＜質問意見：山名清郷氏＞

・琉球ブロックの立ち上げについて予算

化されているが、説明を聞きたい。
＜八木代表幹事＞
・去年の後半から、琉球ブロック立ち上げの準備を行ってきた。
・入会候補者も10名ほどそろってきて、ブロックの立ち上げが現実化してきたので、１３期で予算化をした。

４）規約改正の件
規約改正の件について、代表幹事の八木健一氏より報告があった。
●役員等
・現行は、関東ブロック連合が４人で１２名であったが、琉球ブロックの新設にともない、幹事１５名以内の変更案を提案したい。
・役員等の改正案につき、審議し、満場一致で承認された。
●委員会
・委員長の任期について以下の内容が提案された。
「３　委員長の任期を２年とし、再任を妨げないが、連続して２期をこえることがで
きない。ただし委員の任期に係わる規定は当該の委員会による。」
・質疑により、以下の修正案が提案された。
「３　委員長の任期を２年とし、再任を妨げないが、連続して２期をこえることができない。４　委員の任期に係わる規定は当該の委員会による。」
・審議を行い、役員等の変更改正案は満場一致で承認された。
●付則の変更
・付則の変更の説明があった後、改正案は満場一致で承認された。

５）議案の承認
議長より、第１号議案（第12期活動報告及び収支報告承認の件）、第２号議案（第13期活動計画及び予算計画承認の件）、第３号議案（規約改正の件）について、議場に図り、議案がすべて承認されたことが確認された。

６）報告及び自由討議
代表幹事の八木健一氏による報告の後、自由討議に入った。
●海外会員、ふるさと会員制度について
・準会員と同等の資格で、海外会員制度をつくった。
・出身地に対し、予算をまわせるふるさと会員制度を考えている。
これに対して、以下の質問、意見があった。
＜土田旭氏＞
・海外会員も正会員で、会費のみ準会員と同等の資格にできないか。
＜八木代表幹事＞
・そういう方向で検討する。
●今期入会金の免除について
・琉球ブロックの新設や若手会員の増強をかんがみ、今期１３期に限り、入会預り金を免除する。
これに対して、以下の意見があった。
＜質問意見：加藤源氏＞
・入会金の廃止も考えるべきでは。その場合、預かり入会金を返す返さないのは判断は、各会員ににまかせる。
＜監査役：大塚守康氏＞
・ＪＵＤＩでは入会金を預かり金としているが、通常は普通に予算化して事業費として活用できるはずのもので、他団体では一般予算に流用している場合が多いと思う。
・入会金を廃止すると、会の財政上、運営安全面で問題がでると思う。
・また、ふるさと支援制度は本部の予算執行上、難しい問題があると思う。
＜高見公雄氏＞
・入会金について、今年度のみの入会金免除の提案について、出席者の承認をいただいた方がよいのではないか。
この点について議長が改めて議場に承認を求め、「今年度１３期のみの入会金免除の提案」が全会一致、拍手で承認された。
＜質問意見：小浪博英氏＞
・関西ブロックのＮＰＯ法人化の必要性の根拠を聞きたい。
＜関西ブロック：堀口浩司氏＞
・道頓堀プロジェクトの契約行為の時に必要性を考えた。
＜大塚守康氏＞
・契約を行う場合は、すべて本部で行うべき。
＜土田旭氏＞
・ＪＵＤＩの運営は、代表幹事の複数代表制でうまく機能していると思う。ＮＰＯ法人化すれば、そういう仕組みも変更しなければならないのではないか。
＜加藤源氏＞
・ＪＵＤＩにＮＰＯ導入を以前検討したが、メリットがないと判断した。
・契約が必要な時は、会員の会社を通すような方便を考えればいいのでは。

7）琉球ブロックからのあいさつ
琉球ブロック初代幹事に推薦された石嶺一氏より、ブロック立ち上げ承認後のあいさつがあった。「今総会をもって、琉球ブロックの立ち上げブロック幹事就任を承認していただいてありがとうございます。『沖縄』ではなく、『琉球』の名前にこだわった。琉球ブロックのコンセプトを早急に煮詰めていきたい。今年沖縄にはじめてモノレールができるので、モノレールからの都市景観などもテーマにしていきたい。」
最後に吉田慎吾氏より「新ブロック誕生など明るい話題で、今後もＪＵＤＩが展開していくことを期待したい。」とのあいさつがあり、第13期定例総会は閉会した。

事務局より

1．退会者（2003年3～4月）

伊藤勝彦、今本隆章、小沢修、尾登誠一、関寛、間野賢二、吉田清明（敬称略）

2．住所変更等（敬称略）

氏　名	変　更　内　容（新）
秋山　裕史	ＥＤＡ環境デザインアソシエイツ 〒150-0021　東京都渋谷区恵比寿西2-16-13-401 Tel. 03-5728-2386 Fax. 03-5728-2387
有光　友興	有光友興再開発研究所 〒663-8141　西宮市高須町2-1-32-729　Tel. &Fax. 0798-44-0809
伊藤　隆	㈱日本衛生センター 〒186-0011　国立市谷保6442 Tel. 042-576-0110　Fax. 572-2142
井上　善朗	静岡県都市住宅部都市整備総室 〒420-8601　静岡市追手町9-6 Tel. 054-221-3186　Fax. 221-3640
熊澤　雄一	(合)熊沢生活デザイン研究所 〒171-0051　東京都豊島区長崎4-37-16　Tel. &Fax. 03-5966-6030
小浦　久子	大阪大学大学院工学研究科 Tel. &Fax. 06-6879-7627
篠田　伸生	㈳全国土地区画整理組合連合会 〒102-0093　千代田区平河町1-7-20 Tel. 03-3262-1476　Fax. 3262-1794
篠原　修	東京大学大学院工学系研究科 Tel. 03-5841-6138　Fax. 5841-8505
田村　博美	㈱オオバ 西日本環境都市デザイン推進室　Tel. 06-6943-9040 Fax. 6943-5966
丹沢　孝一	㈱エイ・ティー・システム 〒150-0001　渋谷区神宮前5-43-8 ｻﾝﾊｳｽ高野1F　Tel、Faxは変更なし
千葉　桂司	都市基盤整備公団 関西支社 〒536-8550　大阪市城東区森之宮1-6-85　Tel. 06-6969-9004 Fax. 6967-2644
成瀬　惠宏	㈱都市設計攻防 〒206-0025　多摩市永山1-17-10 ﾒｿﾞﾝﾄﾞｰﾙ永山101 Tel、Faxは変更なし
舟引　敏明	国土交通省都市地域整備局 〒100-8918　千代田区霞ヶ関2-1-3 Tel. 03-5253-8418　Fax. 5253-1593
松井　英明	㈶日本色彩研究所 〒339-0073　岩槻市上野4-6-23 Tel. 048-794-3817　Fax. 794-3901
三原　久徳	㈱アーバン・ウイング 〒103-0023　中央区日本橋本町1-2-5　本町会館4F Tel. 03-3241-7760　Fax. 3241-7760
宮前　保子 宮前　陽一	㈱スペースビジョン研究所 〒540-0012　大阪市中央区谷町2-9-3　近鉄大手前ﾋﾞﾙ11F Tel、Faxは変更なし
安田　祐嗣	㈲安田建築設計＋総合計画 住所、Tel、Faxは変更なし
山本　忠順	㈱ＬＡＵ公共施設研究所 住所、Tel、Faxは変更なし

編集後記

編集後記
ふるさと新潟市をとりあげ、寺町、掘割再生など全国的にはあまり知られていないテーマの特集を組むつもりで、北陸ブロックの横山氏に全面的な協力をいただき、「にいがた寺町からの会」が主催したシンポジウムや日頃の活動などの紹介を中心に編集する予定で作業を進めてもらいました。ところが、いざまとめようとした時に、ＪＵＤＩ北陸ブロックの活動や新潟市のまちづくり、景観づくりの中心的存在であり、今回の編集作業にも協力していただいていた新潟大学の樋口先生が京都大学に移動することとなり、急遽内容を変更することにしました。
若干、ローカルすぎる話題もありますが、新潟のまちづくり、景観づくりの総括を通して、様々な情報と知恵を読みとっていただけると思います。
横山さん大変お疲れさまでした。
（沢木　俊問）

広報・出版委員会

澤木　俊問	石崎　均
土田　旭	伊藤　光造
近田　玲子	加茂みどり
菅　孝能	河本　一行
中嶋　猛夫	森川　稔
櫻井　淳	横山あおい
松村みち子	吉田　慎悟
白濱　力	作山　康